

設立の過程

田之筋地区は中心部に小学校、保育園、公民館、郵便局と「喜ちゃんない屋」の前身であるJAひがしうわ田之筋店など主要な施設が集中していました。地域の活力を維持するためにも全施設が活動を続けることは大切であり、特に車などの移動手段を持つていないお年寄りのためにも買い物ができる施設は必要でした。しかしJA田之筋店の先行きが不透明であり、撤退してしまうのではないかとという懸念が地域の住民の中にはありました。実際、住民の皆さんにアンケートで意向を伺ってみると、回答

者の内で7割の方は店舗が無くなってしまふと困るという意見をお持ちでした。JAとしても委託店化を進める方針であったので、遊休施設として使われなくなり地域の活性化を妨げてしまうことを防ぐために、買物のできる店舗を地域で運営していくことを決断し「企業組合 喜楽たのすじ」を立ち上げました。運営母体として会社組織ではなく企業組合という形態をとったのは、地域の人に自分たちのお店だという認識を常にもってもらうことで、買物のできる場所を地域に存続させるための選択です。そうしてJAから店舗の場所を継承し、食品、雑貨品から衣料、営農・園芸品など幅広く取り扱う店舗として「喜ちゃんない屋」はスタートしました。

買い物バスの運行

喜ちゃんない屋は地区の中心部という利用しやすい場所にありますが、最も遠い集落だと3キロメートルほど離れています。また地区を通っている公共交通機関は前述のとおり市の福祉バスのみであるため、買い物弱者の立場に置かれている住民はお年寄りを中心に多く存在していました。その対

田之筋地区の概要

田之筋地区は西予市宇和町にあり、松山自動車道の鳥坂トンネルを抜け、西予宇和インターチェンジ付近までの間にある、山間の細長い地域です。世帯数は630戸で人口が1,500人となっています。地区の課題としては、農業者の平均年齢が60.8歳と高齢化が進んでいること、地域の公共交通機関が市営の福祉バスしかないために、買い物に不便を感じている高齢者がおられることが挙げられます。



「喜ちゃんない屋」店舗全景

特集④ 空き店舗の活用

喜ちゃんない屋で村興し!



企業組合 喜楽たのすじ 理事長 大塚 俊秋 (西予市)



店舗内の様子

店舗内の様子



策として、毎週水曜日の午前中に買い物バスを運行しています。毎回10名から15名程度の方に利用してもらっており、中には90歳代の方もおられます。依頼があった時には注文された品を配達することも行っています。これによって、買い物弱者の問題を解消するだけでなく、お年寄りの方々に買い物を楽しむ機会を提供しています。

惣菜・弁当の宅配事業

「たまには食事を準備する手間から離れてみたい」という希望が顧客の方から出たことをきっかけに、毎週月曜日には地元食材を生かした惣菜、手作り弁当を作る取り組みを始めました。時間にゆとりのある女性のグループが、普通の家庭の味をお届けすることを大切に考えて調理しています。柚子をくり抜いて容器にするなど、季節感を味わえるメニューになるよう毎回工夫を重ねています。惣菜とお弁当ですが、田之筋地区内に関しては注文による宅配を行うほか、喜ちゃんない屋でも販売しています。

農林業を題材とした
交流イベントの開催

総務省の地域力創造アドバイザーである斉藤俊幸氏からご提案を受けてピザ釜を製

作し、ピザづくりを通じた交流イベントも行っていきます。ピザはみんなが同時に作り、食べ、楽しめるので、大人数での交流を行うのに適しています。喜ちゃんない屋は小学校が近くにあるため、田之筋緑の少年団に所属している小学生を主な対象として始めましたが、お年寄りにもピザのファンになる人が出てきました。今後は公民館の事業である文化祭や運動会とも協力してピザづくりを行いたいと考えています。

今後の方針

今後は店舗内に簡単な飲食部門を立ち上げて、人が集まる場を作ることを検討して



ピザづくり体験

います。地元の食材を利用したうどんやそば、五目ずし、炊き込みご飯など、なじみのある料理をつくることで広い世代の方に集まってもらうことが目標です。また、この飲食部門を通して地元で生産される農産物を活用する機会も作っていききたいと考えています。



弁当づくり

最初にも書きましたが、買い物のできる場所を地域に継続させ続けていくためには、地元の方々に自分たちの店であるとの認識を持ち続けてもらうことが重要です。例えば喜ちゃんない屋では働いている店員の方も出資者の一人となっています。そして地域の人たちのお店として、大きな組織ではなかなか行いにくい地域住民に密着した店舗運営を自由自在に、細やかに、そして温かみをもって担っていききたいと考えています。

田之筋地区にはたくさんさんの良い素材があります。自然も農地もたっぷりあり、若者は少ないですが、団塊の世代など人材は豊富です。またインターチェンジが近くにあるなど、交通の利便も良い場所です。そういった良い素材を活かし、自分たち住民が人々の手を借り、人に手を貸し、また地域外の人々とも共生して「かがやくむら」たのすじ」を造っていききたいと思っています。